どんぐり達の輝き（後編）

―山麓南町図書館物語―

瑞貴くぬぎ

「悪戯もまあ綺麗に決まったからねえ」
床に潰れた野呂先生を思い出す田神さんの目が、すでに少し遠くを見ている。
「でもま……あれはのら先生が悪いよ」
横目で少し意地悪く笑ってみせるのは、きっと木崎さんを気遣っての事だ。

エントランスホールに射し込む光が柔らかい。一階は今、とても静かだった。
若菜さんが休憩から戻った。
「じゃあ、次は木崎君休んで。そしたらそのまま二階に戻って。今日はありがと」
田神さんの言葉で、木崎さんは本来なら午後は二階のコマ割りだった事を思い出した。
「あ、田神さん、僕も一緒に今のうちに休憩してもいいですか？」
一緒に休憩、その珍しい僕の申し出に、田神さんはちょっと驚いた風だった。が、夕方の混雑を前に、幸い利用者さんも少ない。
「そうだね、空いてるうちに行っちゃって」と了解してくれる。
「混んで来たら、呼んで下さい」
「若菜さんがいるから大丈夫だよ」
名前が上がった若菜さんの方を見る。すでに返却本の整理に取り掛かっていた彼女はその手を止め、一瞬ちらりと僕の方を向くと、何かを拒むかのようにプイと背中を向け、再びブックトラックに返却本を並べ始めた。

「コーヒーでいいかな？」
木崎さんは僕のカップも併せて机に並べると、インスタントコーヒーの瓶を手に取った。
「自分でやります」
「こんな事くらいで遠慮するな」
それからぽつりと
「今日は迷惑かけたからな」
あらためてそう言う。
「砂糖とミルクは？」
ブラックでと答えると、俺と同じだ、とコーヒーの粉を小匙でカップに運ぶ。
窓の外の景色はまだ明るいので、つい明りも点けないままにしているものの、部屋の中はすでにかなり暗い。
朝使っていた修理キットの入った箱が、長机の片隅で息を潜める。
ほんの数時間前の事。なのに何だかとても前の事のように思われる。
「教えて欲しい事があるんです」
僕は木崎さんに切り出した。
「やっぱりそうか」
分かりやすいんだ君は、と小さく笑いながら、僕の前にカップを置く。
「何を訊きたい？」
彼はコーヒーを軽く含み、僕の言葉を待つようにこちらを見た。

カップを掌に包むと、温かみにうっすらと汗を感じる。
「望月君の持っていた物を、木崎さんはずっと『紐』と言っていましたよね」
「ああ」
「具体的にはどんな紐でした？」
「何故そんな事を訊きたい」
木崎さんの鋭い声が僕の言葉を弾き返そうとする。
「例えば色は？あるいはどんな種類の紐でした？」
「あの位置からそんな事まで見るのは無理だ」
「勿論、その時点では。でも今ならどうでしょう？」
「どういう意味だ」
「一つには望月君の素振りが、気になっているんです」
木崎さんの黒いマグカップが机で硬い音を立てた。木崎さんは肘を突いたまま目をこちらに向けると、僕の出方を窺った。
「騒動が静まった後、望月君と野呂先生が二人で話し合った時、望月君は背中を叩いた事を、素直に先生に謝っています。なのに何故、紐の件には一切触れず黙り通したのでしょうか？そんな必要は無かったと思いませんか？」
「さあな」
木崎さんはさらりと言い放つ。
「もう一つの疑問があなたです。野呂先生が紐の話を興奮しながら口にした時にあなたは『どこにも紐らし

き物はありませんよ』と現場について語っているんです」
　ここで矛先が自分に向いた事を彼ははっきりと自覚したようだ。
「そうだったか？」
　特に同意もせず、否定もせず、こちらの様子を見ようという構えだ。
「けれど、紐は確かに張られていた。あなたはそれを知っていた」
「そうだな」
「つまり誰かの手によって回収され、あなたはその事実を既にあの時点で知っていた」
　僕は特別な事は何も言っていなかった。混乱の中に埋もれていた事柄を、整理して見せたにすぎない。
「君は、俺がその紐を回収したと言いたいんだな」
「まさか、あなたはずっと僕と一緒にいたじゃないですか」
「じゃあ、何が言いたい？」
「木崎さんが言った言葉の意味を考えてみたんです。野呂先生が『とっくに回収したんだろう』と言った時、木崎さんこう言っているんです『そんな動きをした子供なんて見ていませんよね？』……何故こんな事を自信たっぷりに言えたんですか？回収されていたのは当然と言うあなたが『そんな動きをした子供はいない』これは、『そんな動きをしないまま紐は回収された』という意味が裏にあったから言えた言葉じゃないか……そんな気がするんです」
「……」
「無駄な動きをまるでしないままに紐は回収された。その事実をあなたは知っていた」
「仮にそうだとして、それが一体何だと言うんだ？」

「そうなると次の疑問が出て来ます。思い出してみてください。野呂先生が所持品検査を言い出した時に、あなたは何と言ったか。あれだけ先生に楯突いていたあなたが、一番の圧力が加えられたあの場面で。館長も、教育委員会の谷村さんも好ましくないと言った所持品検査を、木崎さんだけが『キッズルームにして下さい』といともあっさり受け入れているんです。おかしいと思いませんか？」

木崎さんはわずかに首を右に振り、それからカップに目を落とす。視線の方向を定めながら、あらためてコーヒーを口にする。

「あなたは分かっていたんです。そんな事をしても何も出てこないと。いえ、むしろそんな事をすれば、困る事になるのは野呂先生の方だったと」

話がそこに及ぶと、木崎さんは静かに、自分を顧みるように目の焦点を窓の外に流した。

「回収された紐を、今持っているのは木崎さんですね？」

木崎さんの視線の先の堤防では、西日に照らされながらゴールデンレトリバーが散歩している。その別世界から彼の視線が暗い部屋に引き戻され、僕を向いた。

「仮に君の言う通りに紐が回収されたとして、何故俺が持っている事になる？何故、望月君が自分でどこかに隠したとは考えない。そう、例えば本棚の本の後ろに隠す事だって可能だった筈だ」

「彼は怪しいと思われるような動きをしていない。その自信が木崎さんにある以上、その可能性はないと思います」

「だからと言って、どうして俺なんだ。のらの言動には職員全員が反感を持っていた」

「紐の存在を知っていた職員はあなただけです」

「なら他の児童が受け取ったという可能性は」

「有り得ません。それではその子まで騒動に巻き込まれます。そんな可能性が少しでもあるのならば、あなたは、絶対に、どんな事をしても、所持品検査を止めさせようとした筈です」
僕はゆっくりと、丁寧に、木崎さんの目に訴えかける。
「たしかに……そうだな」
「回収した紐はあなたに手渡された。望月君が安全な事をあなたは知っていた。そして彼はあなたを庇うために最後まで黙り通した……そう考えればあの状況の全てが納得出来るものとなります。だから、聞きたいんです。あの時、本当は何があったのか。ごく短い時間の中で二人の間にどんなやり取りがあったのか。まだ大切な事を、僕達は知らないんじゃないか……そんな気がしているんです」
「そうか……」
一つの区切りとなったのだろう。
木崎さんは黙って静かに、ポケットから掌に収まる程度の小さく薄いプラスチック製の品を取り出し、机の上に置いてみせた。
手に取ると、懐かしい感触がする。
「巻尺……」
家庭科の授業で裁縫箱に入れられている巻尺だ。
引っ張った分だけの長さが出て、固定される。真ん中にボタンがあり、これを押すと、ゼンマイ仕掛けで『シャッ』と鋭く収納される。
たしかにこれを紐として張ったのなら無駄な動きがいらないままに一瞬で手の中に収められるだろう。
「君が言うようなやり取りなんて何も無かった。悪戯が成功し、ホワイトボードが倒れたのを見た時、これ

は大事になると思った。だから、俺があいつの手からこれを奪い取った……それだけの話だ」
　野良先生が這い出し、立ち上がった時、木崎さんは咄嗟に「貸せ」と巻尺に手を伸ばしてしまったと言う。
「なるほど、納得しました。あ、でも、これだと結ばれた反対側は、どうにかしてほどかなければなりませんよね？」
「壁を作っていた女子の一人が、素早くそれはやってのけた。ほんと、あいつあれで周囲に人気あるんじゃないか。いいチームワークだったんだ」
「ほだされましたね」
「ついな……」
　最初からこんな悪戯の為に巻尺を持ち歩いていたのではないだろうと、木崎さんは言う。こういう物を、意味も無くただ面白がり、玩具に持ち歩く……子供とはそんなものだと。
「誰かを庇っていた……そうかもな。でもそれは俺なんかじゃない。黙り通す事であいつが護りたかったのは、手を貸してくれた女子児童だったんだろう」
「……そうでしょうか」
「ああ、あり得ない。それではあまりにも出来過ぎだ」
木崎さんはそこまで話すと、漸くひと息ついたというように、最後のコーヒーを飲み干した。
「帰り際の彼に、小声で何かを言いましたよね？『日曜日に来い』って言ったあとに続けて。何を言ったんですか？」
「ああ、手の中に忍ばせたこいつを見せながら『その時にこれは返す』ってな」

「嬉しそうに笑っていましたね」
思い出したのだろうか「そうだな」と頷く木崎さんの表情が、すっきりと力の抜けたものになった。
「さて、休み過ぎた。もう行かないと」
「そうですね。僕も」
二人で立ち上がる。
「若菜さん、君を心配していたな」
「そうでした？」
僕の言葉に、木崎さんは大きく目を開き、何かを探るように僕を凝視した後
「まあいい」
とドアに身体を向けた。
「今の話、みんなに話していいよ。安心するだろ。俺も、館長に報告しておく。全部俺の責任だ」
木崎さんが負わなければならない物、それは果たして責任と呼ばれなければいけない物なのだろうか。
心に浮かんだ疑問を追い掛けようとしても、答は上手く言葉になってくれようとしなかった。

翌日、午前中の空き時間に、僕はどんぐりと山猫の修理の続きに取り組んでいた。
長机には再び針や糸、様々な物が広げられ、僕は曲がった針を扱いながら、四折り目を無事に終えようとしていた。
結局、僕は真相を誰にも話さなかった。木崎さんが悪戯を見逃した件までは既に伝わっている以上「このままでもいいか」といった気持ちが先に立ってしまったのだ。

「ねえ萩君、昨日の話なんだけど」
ずっと黙って作業を続けていた若菜さんに、静かに切り出された。
「はい……」
神妙な面持ちになる。
「本当の所どうなの？」
「えーと、そう……ですね」
真っすぐな質問だ。覚悟はしていたつもりだった。けれどどうやって、どこから話したらいいのだろう。
そもそも、若菜さんは、一般カウンターにずっと着いてくれていた。その為に出来事の一切を見ていないのだ。
「どこから話したらいいですか……？」
そっと、確認を求める。
若菜さんは、案外けろりとした口調で「う～ん」と考えると
「じゃあ、作品自体の君の解釈から」
「……え？」
僕の脇には『どんぐりと山猫』の表紙が、本体から切り離された状態で置かれていた。彼女はそれを手にして軽く目を落とす。
「まず、君がこの作品をどう捉えているのか教えて欲しい。それから私の言った『過去の判例』の話にどう絡むのか、教えてくれると嬉しいな」
ほっとしたのが顔に出てしまったのだろう。

「何、その顔?どうしたの?」
彼女の笑い顔に、僕は慌てた。
「いえ、あの、本当にこの作品は解釈が定まっていない作品です。なのでその……」
切り替えないと。
昨日約束していた。そう、どんぐりと山猫の解釈だ。
「うん。いろいろに言われているみたいね。だから、総合的な判断は今はいらない。君の言葉で聞きたい」
あとそれからね、と言葉を切った彼女は、修理中の僕の手元の本を指差した。
「綴り終えたら他の本と同様。背のりを塗って固めてしまって。寒冷紗を張る前に一日置くのも一緒。あとはもう出来るよね」
寒冷紗を張れば、その糊の乾くまでにまた一日待つようになる。
一度分解した本が、元の姿に戻るまでには数日を要する。
窓の外、堤防の向こうでは樹木が大きく揺れている。意外と風があるらしい。稲穂が時折一斉になびいては、はたと静まる事を繰り返している。
「いい天気が続くね」
僕が外を見ていた事に気付いた彼女が窓際に立つ。
「気持ちいい」
館内は密閉されている。風はここまで届かない。景色だけが静かに揺れ動く。
「カウンターの方、様子聞いて来ます」
「うん。よろしく」

一旦部屋を離れるとそのついでに書架に回り、『どんぐりと山猫』を収めた賢治全集を用意する。作業中の絵本より忠実なものが必要になると思っての事だ。

休憩室に戻った時、彼女は鏡に向かい、前髪を何やら手櫛でいじっている最中だった。僕を認めるとすぐに椅子に戻り「どうだった?」と聞く。

「しばらく大丈夫だそうです」

そう、と安心したように彼女は

「コーヒーでもいれようか」

とカップを二つ取り出した。

「ブラックだっけ?」と確認しながら、自分の分にはミルクだけを加え、机の上に置く。

僕はお菓子箱を覗き

「オレンジピール・チョコチップ・抹茶……あとプレーンですね。どれにします?」とクッキーを一枚ずつ広げる。

「じゃあ…抹茶」

抹茶味を彼女の席に置き、自分にはオレンジピールを取ると、残りを箱に戻し、椅子に座る。

「午前中くらいは大丈夫だから、今日はしっかり覚えるようにと言われました」

「優しいね、みんな」

彼女は個装袋を開け、口元で小さくクッキーを砕く。

「今朝、寝癖が付いていて、直せなかった」

あらためて前髪をつまみ上げながら、目を上に向ける。

「後ろは縛っちゃうから問題ないでしょ？でも前はね、気になる」
言われても、どう寝癖なのだか分からない程度だ。
「こんな仕事場も少ないよね。服装は普段着にエプロンだけ。髪はこんなで、メークも最低限。これでカウンターに着いて利用者の方と接するのＯＫって」
文化センターでスピーチの時の彼女が、いつもと別人のようにきちんとメークをし、スーツ姿で現れた時を僕は思い出した。
「あの時、萩君は戸惑っていたものね」
あの時は深津さんにすっかり茶化されてしまった。
本当の所、戸惑うというよりも少し寂しかったのかも知れない。
見慣れない、突然の大人の身なりの彼女に距離を感じたのだ。同じ場所に立つ社会人としては情けない話ながら。
「で？」
「はい？」
「どんぐりと山猫」
「はい」
そうだった。
広く、さまざまに読まれているどんぐりと山猫。
僕は書架から借りて来た賢治全集を彼女の前に開いてみせた。
「用意して来たんだ」

「はい」

古い本だ。旧図書館時代からの本だろう。布張りの青い表紙を開き、目的のページに辿り着くと、彼女の側に差し出し、半分ずつに読む事が出来るように置く。

「最初に手紙を受け取った時の一郎の反応を見てください」

一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそっと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

一郎の純朴さがとても良く表れている場面だ。

「この純朴な小学生が、山の中の野原で出会った山猫から、まず『いかがですか』と煙草を勧められるんです。少年にとっては、これまでには考えられない、驚きの出来事だった筈です。勿論一郎はその誘いを断ります」

煙草を断られた山猫は一郎にこう言う。

「まだお若いから」

小学生に煙草を勧める奇妙さ、山猫と一郎の奇妙な関係。

この奇妙さは、そのまま山猫から一郎への依頼の内容にも続いていく。一郎は、騒ぎを続ける黄金のどんぐり達をどう裁けばよいかと、山猫から相談を受ける。

山猫は言う

『あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです』

「山猫が面倒な裁判を依頼する相手として一郎を選んだ理由とは、何だったのでしょうか？」

「一郎を選んだ理由？」

どこかに書かれていただろうかと、若菜さんは手元の賢治全集のページを繰る。それを構う風もなく、僕は言葉を続けた。

「実はどこにも書かれていません」

「何故訊いた」

二日間収集のつかなかった裁判を、三日目にたちまち静めてしまったのが一郎の入れ知恵の言葉だ。

『このなかで一番えらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなってなくて、頭のつぶれたようなやつが一番えらい』

「この言葉って、このお話の中で割と重要視されていますよね」

「うん、賢治の倫理観が表れていると言われるみたい」

「ええ、けど、僕にはそう思えないんです」

「違うの？」

「一郎はこの言葉を言う前にこう切り出しています」

『そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう』

「若菜さんなら？」

「え？」

「若菜さんなら、本当に大切な事を伝えたい時に、こんな言い方で話し始めますか？」

一方的で、どんぐり達を黙らせるためだけに放たれた言葉だ。誰も名乗り出ない事を見越した言葉。ただの言葉の鞭。この言葉の事を一郎はこう言う。

『僕、お説教で習ったんです』

「もし仮にこの言葉が何らかの賢治の倫理観に根差して書かれていたとしても、この場の一郎にはまだ扱い切れてはいません。一郎は特にすぐれた知恵を持つ子でもなく、とんちの利いた子でもなく、ただ大人の言葉を真似し、どんぐり達に押し付け、彼らを黙らせただけです」

裁判を終えたあとの、一郎と山猫との最後のやり取りの部分を僕は指で示した。

「これからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかいりませんよ。」
「はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」
一郎はわらって言いました。
「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめた方がいいでしょう。」
そして山猫がお礼について申し出る場面
「そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」
「黄金のどんぐりがすきです。」

黄金のどんぐりが好きという金銭欲。「そいつだけはやめた方がいいでしょう」と言い切る名誉欲の目覚め。更にもっと前の部分の野原に辿り着いた所で、馬車別当に向けて並べてみせたその場しのぎのお世辞には大人の処世術が顔を覗かせる。
「これらの全てを一番最初の、葉書を受け取った時の一郎の反応と見比べてみて欲しいんです」
僕の言葉のままに、若菜さんが物語の初めにページを繰る。
子供々々した最初の反応はなりを潜め『うちじゅうをとんだりはねたり』した純朴な少年はもうどこにも見当たらない。

「金色のどんぐり、彼らが子供の象徴です。でたらめで、まとまらず、勝手な事ばかり言い、収まりがつかない。自分勝手で幼くて、でもキラキラに輝いている。それが金色のどんぐり達。子供たちの世界です。賑やかで、負けず嫌いで、純粋で。とても綺麗な心です。でも……ずっとあのままではいられない……ずっと

そこにいる訳には行かないんです」

帰り道、一郎が山猫と一緒に山を下りるにつれ、どんぐり達は金色の輝きを失う。そして馬車が止まった時には、当たり前の茶いろのどんぐりに変わってしまっている。

「この時に輝きを失ったのは黄金色のどんぐり達だけではなかったんです」

「一郎もまた、どんぐり達と一緒に輝きを失っていた？」

「ええ、或いは一郎が輝きを失った事を、どんぐりを通して描いて見せたと言ってもいいかも知れません。一郎も、どんぐりも、駄目になってしまう訳ではありません。時間を経て、普通になるんです。一郎は普通の大人に、どんぐりは当たり前のどんぐりに変わるだけです。」

「なるほどね。で、私の言った『過去の判例』っていうのは、今の君の考察の中に入る余地はあるの？」

「山猫は、毎年同じ裁判を繰り返していると言っています。その言葉を信じるのなら、一郎の時のずっと前から、裁判は行われていたのでしょう。そしてずっと後にも裁判は続くのだと思います」

「過去の判例は用いずに……って事だね」

「山猫は、過去の判例を用いるつもりはありません。自分で解決するつもりなど最初から無いんです。」

「山猫の本当の目的は、黄金のどんぐり達を裁く事なんかじゃなかった」

「はい。山猫がしたかったのは『どんぐり達を裁く事』ではなく『一郎を招いて、どんぐり達を裁かせる事』だったんです」

「それが君の言う、山猫が一郎を呼んだ理由？」

「一郎は選ばれた特別な子供ではありません。山猫からの葉書はいつの時代でも、全ての子供の元に届く物

なんです。
金色のどんぐりの側に……子供の立場にいた筈だった者が、いつの間にか子供を裁く側の人間になっている。山猫からの煙草の誘い、裁判の依頼は、誰もが通過する時間、誰もが経験する出来事です。……『どんぐりと山猫』はそんな時間を切り取って、ひとつの童話として描いた作品なんです」
「あんな綺麗な童話なんですけどね～」
わざとおどけた口調に、寂しさが混じる。
「大人は嫌いですか？」
「そうじゃないけど……」
若菜さんは
「大丈夫。話はちゃんと受け入れている」と言い、それから
「誰の元にも来る葉書……か」
あらためて僕の言葉をなぞるように呟いた。
「萩君は、自分で覚えている？山猫から葉書が来たのが何時なのか」
「いえ……現実ではそんなにはっきりとした区切りがあるものでもないような気がします」
「そうだよね」
「でも、だからこそ、その瞬間を切り取って、こんな素敵な一片の童話に描いてくれた賢治に感謝の気持ちです」
「……うん」
そっと頷いてくれる若菜さんの目から戸惑いが消え、静かな優しさが戻る。

「あ、それで、訊きたいんだけど」
しばらく焦点の定まらない目を作っていた彼女が、急に我に返ったようにぱちりとこちらを見たので驚いた。
「あの一郎が山に入って行く時の描写……いろいろな生き物や、植物なんかに道を尋ねる所。印象的な場面、不思議な描写なのに、今の君の話からは全部抜け落ちていたよね？あそこはどう捉えているの？」
たしかに、家から、山猫のいる野原に辿り着くまでの道のりについては、今の説明では全て省いてしまっていた。
「そうですね。でも、あの場面、あれはああいう物と思って下さい」
「ああいう物？」
「はい。子供が大人になろうという時、道に迷う子供に向かい周囲はそれぞれにいろいろな方向を指し示します。誰に従うのが正解という物ではありません。むしろ正しい方向を言ってくれる人なんていないと思ってもいい。一郎も、それぞれ皆にいろんな方向を言われ、首を傾げながらも『まあいいや、もう少し行ってみよう』とそのまま歩き続けるんです。周りはみんなああいう物。子供は、自分の力で大人になるべき場所に……山猫の元にちゃんと辿り着く。それだけの描写です」
呆れ返った、でもすっかり生気を取り戻したような表情で彼女は
「ざっくり切り捨てたね～」
弾むように笑う。
「切り捨てたつもりはないんですけど」
「それだけの描写って言った」

ころころと楽しそうだ。
「不思議な世界への入口。一郎が再び訪れる事の出来ない場所に辿り着くまでを巧みに伝える描写として、絶妙だと思います」
「うん」
それからふっと小さく首を傾け、僕の目を覗き込んだ。
「君は本当に、みんなと同じ場所にいて、同じ時間の中にいても、一人で違う物を見ている事がある……そんな人だよね」
田んぼからスズメの群れが舞い立つ。収穫期のスズメは嫌われ者だ。少しでも追い払おうとあちこちに棒を立て、CDのディスクを糸に下げてある。
風が吹くと、それらがなびいてキラキラと光を跳ね返すのだけれど、どうも驚いてくれている様子はない。
「今日は、これ位にしようか？」
まだみんながお昼に来るのには大分早いと思える時間で、若菜さんは作業の切り上げを決めた。
手に持った本を、一旦片隅に置いたり、修理キットをまとめたり、片付け作業に取り掛かり始めた。
僕はカップを二つ手に取り、流しでさっと洗うと、元の棚に戻す。
「先に戻っていて、すぐ終わるから」
彼女は一人で、小物を手際よくまとめてくれている。
言われるままに一旦部屋を出ようとした僕は、何かを拒むような彼女の後姿にふと足が止まった。
『君を心配していたな』……木崎さんの昨日の言葉が意識に重なる。
「やっぱり手伝います」

「いいよ。もうこれだけ」
僕は構わず、机の上の片付けを手伝い始める。
「終わったら、昨日の東小の騒動の件を、少し話させてくれませんか?何が起こって、木崎さんと、どんな話をしたのか、若菜さんに、全部聞いて欲しいんです」
彼女は動かしていた手を止めた。
ちらとこちらを見て、何かを押し殺すような不機嫌を作ると
「何かあったの?」
まるで何も知らないかのように、僕とは目も合わせないまま、小物を集め、再びケースに収め始める。
「はい。少し」
「ふうん」
「でも……何をどこから話したらいいでしょうか?」
一通りの話は伝わっているだろうし、あの騒動だ、大抵の事は聞こえていたと思う。一体どの部分から話したらいいのだろう。
修理キットを片付け終えると、壁際の長机の上に並んでいる、修理を待つ本たちの脇に並べ置く。
「そうね……うん、君の事から聞きたい」
軽く、事も無げな口調で彼女は言った。
「えっ?」
突然の、思い掛けない言葉に、僕の動きが止まった。
「萩君は大丈夫なのか、何かおかしな事になっていないのか?まずそこが聞きたい」

彼女は食器の置かれた棚の前に立ち、たった今僕が片付けたばかりのカップを再び取り出した。
「大丈夫です。僕ではなく木崎さんに、ちょっとした事件がありました」
「でも何だか昨日は、二人で様子がおかしかったけど？」
椅子に座る僕の背中に立つ彼女が、両の手にカップを持ったままで、僕を見下ろしている。
「木崎さんから、少し話を伺いました。それも今からお話しします」
「本当に……大丈夫なんだね」
「はい」
「そっか……」
声から次第に緊張がほどけて来ているのが伝わる。
「じゃあ、最初から全部聞かせて」
コーヒーの粉を入れ、電気ポットのお湯をまず自分の分に注いだ彼女は、僕のカップを軽くかざしてみせた。
「君も、もう一杯飲むでしょ？」
日曜日に望月君がやって来たのは朝、開館からそれほど経っていない時間だった。
「木崎さんはいますか？」
入り口で僕を見付けた彼は、真っ直ぐこちらにやってくると、木崎さんの名前を当然のようにあげた。
すぐに田神さんが内線を二階に掛けてくれる。木崎さんは程なく上から降りて来た。
「よう」

かけられた声に望月君が『にっ』と笑って返す。
差し出された黒い巻尺を両手で包むように受け取ると、ポケットに入れる。
「もう、これきりだぞ。今度同じような事をしていたら、すぐに注意するからな」
木崎さんの言葉に黙って頷く。
「今日はちゃんと本を決めろよ」
その話になった途端、彼は明らかにちょっと甘えたような顔を作った。
「何を読んだらいいのか分からない」
真っ直ぐで、濁りのない笑顔。声変わりするまでにはまだ大分あるだろう高めの子供の声。少しハスキーだ。
悪さをし、逃げ回り、かたくなに口を閉ざしていただけの子。それでいて、誰もがこの子に対して悪い印象を抱いていなかったのは、一つにはもちろん悪戯を仕掛けた相手があの野呂先生だったから。けれど、もう一つには間違いなく、やんちゃそうで、真っ直ぐなこの子の目にあったと思う。
「相談したい」
迷った時には職員に相談して欲しい、あの日、僕は児童に告げた。
「俺は、児童書は専門じゃないから分からないんだ。でもこっちの萩さんに相談すれば大丈夫だ」
望月君は木崎さんを見上げ、
「じゃあ、木崎さんは何が専門なの？」と訊く。
「俺は二階にある法律なんかの本が専門」
そう聞くと彼は

「読みたい」
「まだ無理」
「読める！」
子供の扱いに困っているのか、本の選択に困っているのか、木崎さんが助けを求めるように僕を見る。
「子供向けの法律に関する読み物もあるよ。見に行ってみようか？」
望月君を促す。
「うん。ほら。行って来な」
ポンと背中を叩く木崎さんに
「木崎さんも！」
「うん？あ？俺？」
木崎さんが来ない事には納得しそうもない。
「行きましょう一緒に」
諦めたように木崎さんも僕と望月君の後に続く。
「法律の本って、何が書いてあるの？」
「おい、大丈夫か？何か他に好きな物あるだろ？」
「やだ」
「スポーツの本とか、あと動物の本とか」
「やだ」
「なあ、萩君……」

そんな目でこっちを見たって、どうにもなりませんよ。
「とりあえず、法律の本のレファレンスかかってるんですから、そこに行きます」
これほど弱り切った木崎さんを見るのは初めてという様相で、後ろをおとなしくついて来る。
「二人して何をやっているんだか」
カウンターで笑う田神さんの声がここまで届く。
「そうですね～」
若菜さんの軽やかな声が続く。館内は出来たらお静かに。
「この辺りに法律なんかに関係した本があるよ。何か面白そうなのはある？」
望月君は、案内こそされたものの、それから先どうしたものかとキョトンとした目で立ち呆ける。
日頃それほど本を読む子ではないだろう。だからあの日も悪戯を始めてしまった。帰る直前の残り時間にしても、少なかったとは言えまるきり決める時間が無かったとも思えなかった。
「さて、木崎さん」
僕の目を受けて、木崎さんは逃れようという望みを絶たれたようだ。
「あ、ああ」
彼の横にしゃがみ、本を手に取りながら、選ぶのを手伝い始める。
「法律の仕事って何？」
「ん？ああ、弁護士とか、検察官とか」
「どんな事する人？」
木崎さんがそれぞれについてざっと説明をすると、

「なれる?」
「分かってて言ってるのか?」
「だから、悪い事して捕まった人が、どれ位の罪になるか決める人なんでしょ?」
「まあ、そういう事だ」
「なる」
木崎さんも抵抗を諦めた顔に変わった。
「すっごい勉強必要だぞ」
「する」
「よし、なれ」
「なる!」
まったく何が、自分を庇ったと考えるのは出来過ぎなんだか……
木崎さん、十分これは出来過ぎだと、僕は思います。

参考文献
『どんぐりと山猫』宮沢賢治／著　パロル舎　一九七九年
『新修　宮沢賢治全集　第十三巻』宮沢賢治／著　筑摩書房　一九八〇年

本の修理に関する描写は図書館勤務経験を持つ親族より取材させて頂きました。が、その文責の一切は筆者にあります。ご了承ください。

瑞貴くぬぎさんの『どんぐり達の輝き』
（前編）はこちらの二次元コードから
読むことができます。

また、「山麓南町図書館物語」シリーズの１作目・２作目は
以下の二次元コードから読むことができます。

１作目

２作目

どんぐり達の輝き（後編）―山麓南町図書館物語―

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　瑞貴くぬぎ

令和８年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

東小学校の体験学習での騒動も無事に収まり、静けさを取り戻した図書館。

けれどその時に「本当は何が起こったのか？」萩君の疑問が、事件を穏やかな収束に導きます。日常系図書館ミステリー山麓南町図書館物語第三弾後編です。